

長迫遺跡発掘調査報告

—県営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査—

1 9 8 2

広島県教育委員会
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

目 次

Iはじめに	(1)
II調査の概要	(2)
III遺構と遺物	(3)
(1)弥生時代	(3)
(2)古墳時代	(6)
IVまとめ	(16)

挿図目次

第1図 長迫遺跡周辺遺跡分布図(1:25,000)	(1)
第2図 長迫遺跡調査区及び遺構配置図	(2)
第3図 長迫遺跡第1号住居跡実測図(1:60)	(3)
第4図 長迫遺跡第2号住居跡実測図(1:60)	(4)
第5図 長迫遺跡第3号住居跡実測図(1:60)	(4)
第6図 長迫遺跡第1・2号住居跡出土遺物実測図(1:3)	(5)
第7図 長迫第1号古墳実測図(1:200)	(6)
第8図 長迫第1号古墳主体部実測図(1:40)	(6)
第9図 長迫第2号古墳実測図(1:200)	(7)
第10図 長迫第2号古墳1・2・4号主体部実測図(1:40)	(9)
第11図 長迫第2号古墳3号主体部付設排水溝実測図(1:40)	(10)
第12図 長迫第2号古墳3号主体部実測図(1:40)	(折込)
第13図 長迫第1・2号古墳出土土器実測図(1:3)	(11)
第14図 長迫第2号古墳溝出土石器実測図(2:3)	(11)
第15図 長迫第1・2号古墳各主体部出土鉄器実測図(1:2)	(12)

表 目 次

第1表 長迫遺跡出土遺物観察表	(13)
第2表 周辺遺跡対比表	(17)

図 版 目 次

図版 1 a 長迫遺跡遠景(南東より)

b 長迫第1号古墳調査前全景(南より)

c 長迫第2号古墳調査前全景(南西より)

図版 2 a 長迫遺跡第1号住居跡(南東より)

b 同 上 (南東より)

図版 3 a 長迫第1号古墳全景(南より)

b 同 上 主体部(北より)

c 同 上 溝(南より)

図版 4 a 長迫第2号古墳全景(南西より)

b 同 上 1号主体部(南西より)

c 同 上 2号主体部(南西より)

図版 5 a 長迫第2号古墳3号主体部(南西より)

b 同 上 付設排水溝(左:北西より, 右:南東より)

図版 6 長迫遺跡出土遺物

例 言

1. 本報告書は県営農地開発事業に伴い、昭和56年6月から7月にかけて実施した長迫遺跡群の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、広島県教育委員会から委託を受け財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 本書はⅠ・Ⅱを植田千佳穂が、Ⅲ・Ⅳを三枝健二が分担して執筆し、両者が協議して調整した。
4. 遺物の写真撮影は青山透が行った。
5. 第2号古墳主体部の土壤分析については広島大学理学部柴田喜太郎氏の御教示を得た。記して謝意を表する。
6. 本報告に使用した25,000分の1地形図は建設省国土地理院発行の地形図を使用したものである。

I はじめに

本書は、広島県営農地開発事業大橋地区造成地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の第2年次調査報告である。

本年度の調査は、昭和55年度に行った分布調査、試掘調査に基き石錐椎現第9・10号古墳と長迫遺跡について発掘調査を行うこととしたが、発掘調査そのものについては昭和55年度と同様に文化庁と農林省との覚書「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」の(5)項に基き農政部負担分と農家負担分に分けて行うことになり、前者は財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが長迫遺跡を、後者は県教育委員会が石錐椎現第9・10号古墳を実施した。

長迫遺跡の調査は、昭和56年6月から7月にかけ約1か月間、約3,000m²について行った。

なお、調査にあたっては広島県福山農林事務所芦品土地改良事業所、福山市教育委員会及び地元大橋・今岡・向永谷地区の方々から多大な協力を受けた。関係各位に謝意を表したい。



第1図 長迫遺跡周辺遺跡分布図 (1: 25,000)

1. 長迫遺跡
2. 出尾池遺跡
3. 迫田遺跡
4. 鉢山古墳
5. 下高倉古墳
6. 十二塚
7. 穴田古墳
8. 石錐出土地
9. 石錐椎現古墳群
10. 石錐椎現遺跡
11. 西谷古墳
12. 今岡古墳
13. 今岡小池古墳

Ⅱ 調査の概要

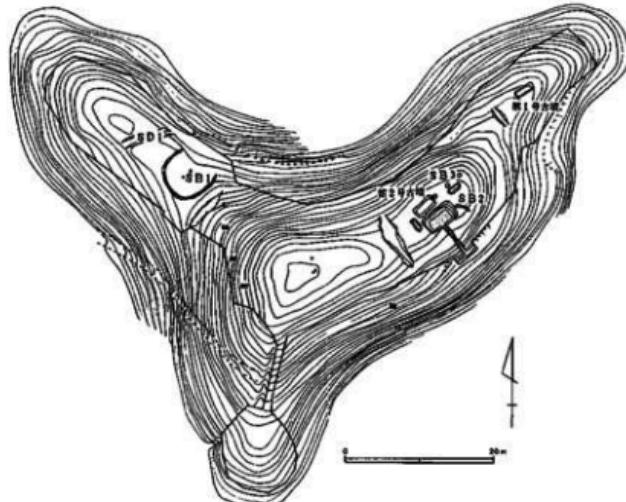
本遺跡は丘陵の最高所より北東、北西、南の三方向に尾根が伸びており、調査区の設定はこの地形に合わせてY字状に行った。北東調査区は $56 \times 10 \sim 14\text{m}$ で、南半には $30 \times 8\text{m}$ の細長い平坦面があり、それより北に向かい緩やかに下ってくる。北西調査区は $32 \times 10\text{m}$ で、丘陵の最高所より比高差 4m で $24 \times 7\text{m}$ の細長い平坦面がある。南調査区は $22 \times 1 \sim 12\text{m}$ で南半には $2 \times 2\text{m}$ の平坦部がある。

遺構は調査区最高所では明瞭でなかったが、派生する尾根に集中し、現表土下 10cm 程度で検出できる状態であった。

調査の結果、古墳2、住居跡3、溝1、ピット3を確認した。古墳は北東調査区の北半に並んで存在し、北より第1号古墳、第2号古墳とした。

住居跡は弥生時代中期のもので芦田川南岸での数少ない資料を付加した。古墳は前期のもので特に第2号古墳3号主体部は排水施設をもつ竪穴式石室で先年調査の福山市加茂町石鎧山古墳群との関連で興味深いものである。

溝(SD1)は北西調査区の平坦面の中央付近を東西に掘り込んだもので性格は不明である。その他、北東調査区の平坦面南西半ではピット3を確認し、北西調査区の平坦面北西半や南調査区より遺物が多少出土したが、他に遺構、遺物を確認できなかった。

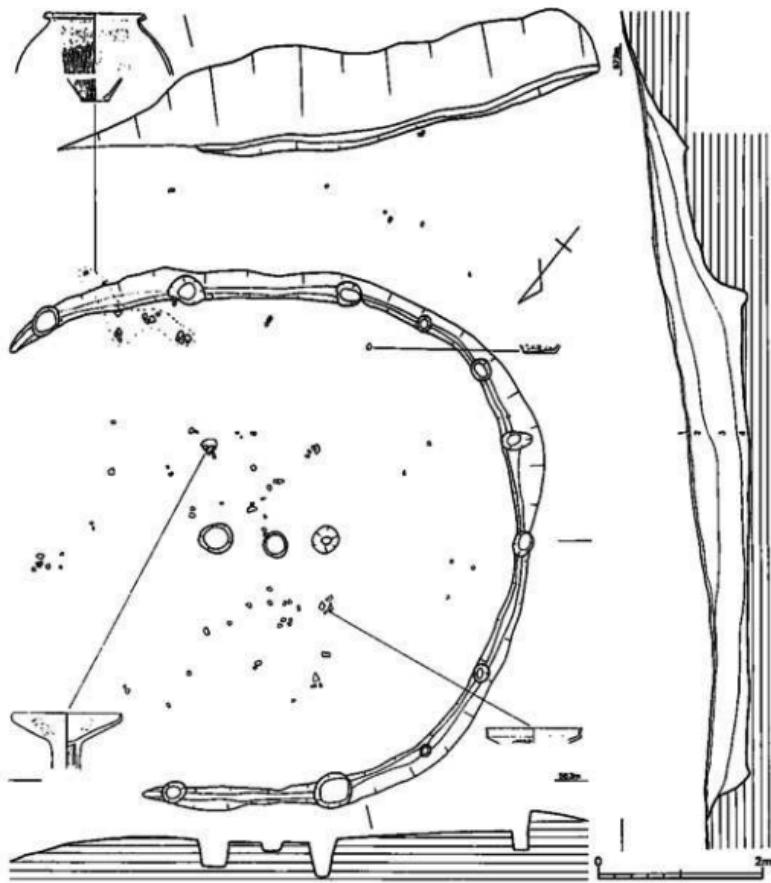


太線内調査区 アミ目は石室および排水溝

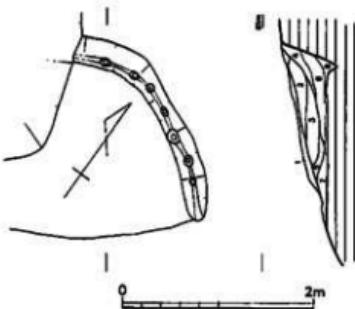
第2図 長迫遺跡調査区及び遺構配位図

III 遺構と遺物

(1) 弥生時代



第3図 長迫遺跡第1号住居跡実測図 (1:60)



第4図 長迫遺跡第2号住居跡実測図(1:60)

中央部には尾根に直交して(N50°E) 1.4m 幅で2本の柱穴を検出した。中央には炉穴をもつ。また側溝中には1~2m間隔で11個のピットが配されている。出土遺物(第6図)のうち弥生土器の多くは床面とテラス面直上から出土した。甌(第6図1, 2), 底部(同3), 高杯(同4, 5)等があり、甌の内面ヘラ削りはみられず、高杯にバリエーションをもつ。出土土器から、弥生時代中期後半に比定される。また覆土上層から7~8世紀代の土師器、須恵器片(第6図8~15)が出土した。

南北に伸びる調査区丘陵の頂部から、北西に派生する尾根のつけ根付近で検出した。北東斜面側を流消失するが、推定約7×6.5mのはば正円に近いプランを呈す。また東南側には丘陵頂部からの傾斜変換部分に長さ6.5mにわたり、浅い側溝をもつカット面をもち、住居跡との間に平坦面を有す。住居壁はこの部分で最も遺存が良く、高さ約60cmを測る。床面の状態は良く

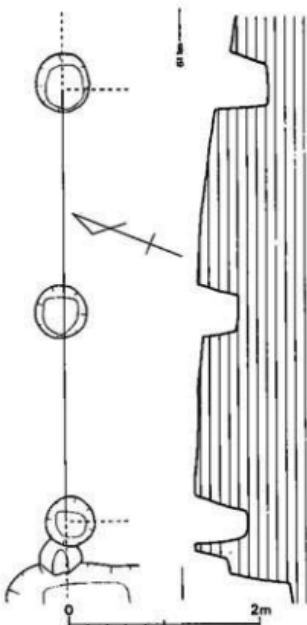
器から、弥生時代中期後半に比定される。また覆土上層から7~8世紀代の土師器、須恵器片(第6図8~15)が出土した。

第2号住居跡—SB 2 (第4図)

第2号古墳々丘下南東斜面際から検出した。墳丘の造成及び自然流出等によって斜面側を失し、南半を3号主体部に切られている。壁高約50cmを測る。柱穴等は検出しえなかつたが側溝中で約20cm間隔で深さ10cm程のピット7個を検出した。床面から楔形石器1点(第6図7)が出土した。また本住居跡付近から、高杯脚部片(第6図6)が出土した。住居構造は第1号住居跡に共通し、これに近い時期と思われる。

第3号住居跡—SB 3 (第5図)

第2号住居跡から約3m程離てた第2号古墳々丘北東部斜面寄りで径50cm、深さ40~60cm程のピット4を検出した。うちひとつは2号主体部により切断され、他の3個は2.1~2.2m間隔で主軸方位をN42°Eに並ぶ。対応するピットはなく出土遺物もない。弥生時代の遺構と思われる。



第5図 長迫遺跡第3号住居跡実測図(1:60)



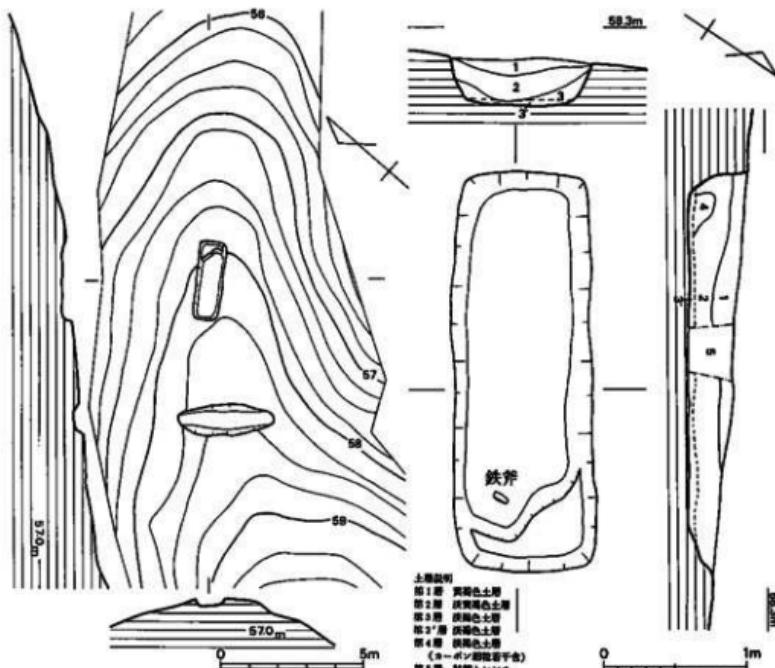
• 1～5（第1号住居跡）、8～15（同上層）、7（第2号住居跡）、6（第2号古墳斜面）
第6図 長迫遺跡第1・2号住居跡出土遺物実測図（1:3）

(2) 古墳時代

長迫第1号古墳(第7・8図、図版1—b, 3)

調査区中央丘陵の北東部尾根上に位置する。植林による旧地形の変形のため墳域は判然とせず、表土層直下で遺構を検出する状態であった。背後の第2号古墳々頂部とは約3mの比高差を測り、その傾斜変換部付近を、長さ3.5m、幅1.2m、深さ20cm程の浅いU字状の溝によって区切り墳域を区画している。また、主体部を挟んで前面側では、標高57mの等高線付近に僅かな緩い段を認める。両側面での地山形成痕は認められないが、推定で長軸20m強、短軸10m前後の不整形な長方形の墳域が想定される。

主体部は墳丘中央で尾根線に平行する長方形の土塙1基を検出した。主軸方位をN56°Eにとり、長軸2.8m、短軸は南西側約45cm、北東側約50cmと東北辺で開き気味となる。掘方は下端付近で緩くカーブし、東北辺側に高さ5cm弱の不整形な段をもつ。またこれとほぼ同レベルで埴底全体に第3層が堆積しているが、鉄斧(第15図1、図版6—10)の出土レペルとも一致し、棺床土と考えられる。遺物はこの他に甕口縁部(第13図1)が出土した。



第7図 長迫第1号古墳実測図(1:200)

第8図 長迫第1号古墳主体部実測図(1:40)

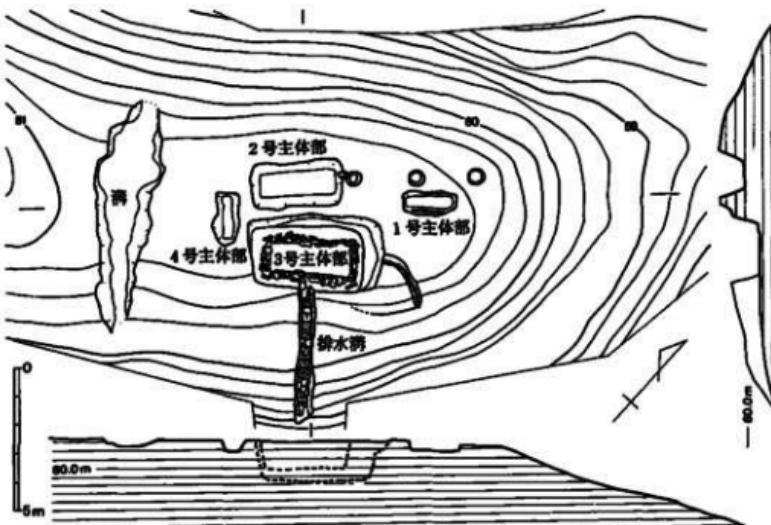
長迫第2号古墳（第9～12図、図版1—c・4）

第1号古墳から南西に約10m離れた調査区中央丘陵の頂部東半に位置する。墳形は第1号古墳同様定形化した墳丘を成さず、一方を尾根に直交する長さ10.55m、幅3~4.5m、深さ20cmの浅い溝状造構によって区切って、墳域を区画し、他の辺は第1号古墳側斜面の標高59~59.5mの等高線に沿って緩かな傾斜の変換が認められる。これは南側斜面に延びる3号主体部排水溝端部付近へと続くものと考えられ、溝及び溝両端付近とこれを結ぶ長軸約33m余、短軸約24m余の不整形な墳域が想定される。

主体部は墳頭部を中心に、土塙3、二重土塙の堅穴式石室1の計4基が検出された。構造及び主軸方位、配置など、その構築にあたって相互に強い規則性を窺うことができる。また第1号古墳同様、各主体部の検出面が表土層直下にあるため、盛土の有無は確認し得なかった。1号主体部の遺存状況及び二重土塙の形態をとる3号主体部の東南辺部での上端掘方の欠失の状況から若干の盛土が考えられるが、溝の形状及び古墳の遺存状況からも地山成形を主としたものであろう。4号主体部を除き、第1・2号古墳の各主体部の頭位は共に北東方向と推定される。

1号主体部（第10図、図版4—a）

第2号古墳々頂部東端に位置する。主軸方位をN55°Eにとる。長軸上端1.9m、下端1.7m、短軸上端0.8m、下端0.5mを測り、底プランは長方形をとるが長辺に幅10~18cm程の段状部をもつため検出面でのプランは不整形となる。断面形は第1号古墳主体部同様、下端付近で緩



第9図 長迫第2号古墳実測図(1:200)

いカーブをもち、3層のバイラン土が堆積する。最下層の第3層は長短軸ともほぼ水平に堆積し、出土遺物のレベルとも一致し、棺床土と考えられ第1号古墳主体部と同様な棺構造が考えられる。出土遺物は南側長辺の南東部第3層直上から、先端部を西面に向かって鉄槍（第15図6・7、図版6-11・12）が2点重なった状態で出土した。付近からは乳緑色の自然円礫が出土。

2号主体部（第10図、図版4-c）

第2号古墳中央部北西斜面寄りにあり、主軸方位 N55°E をとる。平面形態は長軸で上端約3.2m、下端2.7m、短軸は南西辺上端約1.7m、下端0.8m、北東辺上端約1.6m、下端0.9mを測り一辺に僅かに開く端正な長方形を呈す。

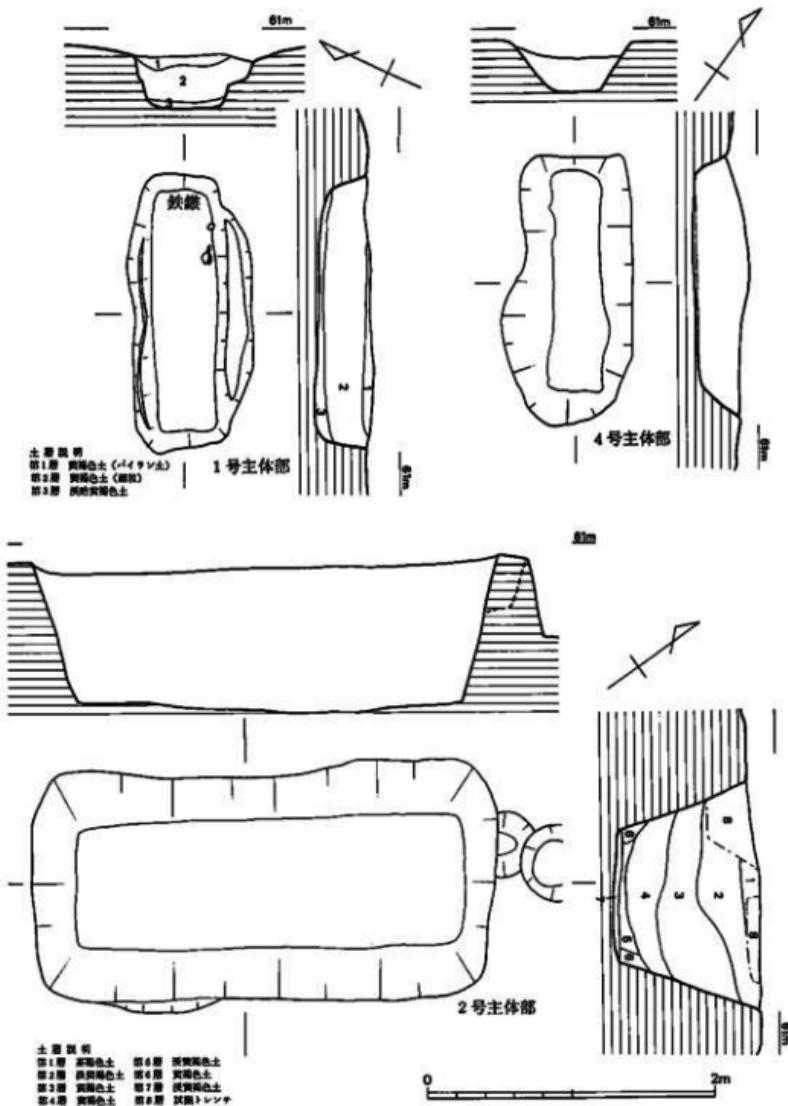
掘方は上端部から約110°前後の傾斜で掘込まれており、花崗岩々盤を掘削しているため遺存は極めて良好で、現状で約1mの深さを保つ。埴底面は中央北東小口寄りに緩い凹み状のカーブをもつ。土層観察では埴底面に約4cm程の棺床土が認められ、両側辺に近接して棺内充満土と裏込土が確認された。また覆土中で赤色土が散見された。

出土遺物は北東辺小口部中央の棺床土直上から鉈2点（第15図2・4、図版6-14・15）が出土した他、上層を中心にして甕（第13図2）、皿（同4）、蓋（同8・図版6-6）及び鼓形器合の可能性のある口縁部（同3・図版6-7）が各1個体分出土している。全て小片であるが器種では甕の土器片が最も多い。このうち皿は本古墳溝出土のものと胎土、調整とも類似し同一個体の可能性が高い。

3号主体部（第11・12図、図版5）

墳丘中央部やや南東寄りに位置する。竪穴式石室をなし本古墳の中心主体といえる。長軸4.65m、短軸2.8m、深さ1.5mを測り主軸方位は埴底プランN50°Eに対し、石室はN55°Eと若干のズレを生じている。埴底は上端から約110°の傾斜で掘込まれ、北東・南東辺で埴底から1~1.1mに幅30~40cmの段をもつ。これは西南辺に見られず、排水溝側では尖られた可能性が高い。本来、南西辺を除き二重土塙であったものと思われる。埴底面は長軸3.15m、短軸1.5mで、下端には幅20cm、高さ5cm弱のテラスが剥る。これは竪穴式石室基底石ラインと合致し、この内側の浅い長方形の凹みは、排水溝の接合部と同一レベルとなり、集水施設の役割を成すものであろう。

石室は粗雑な竪穴式石室を呈し両小口部、特に北東辺から排水溝にかけては最も遺存状態が良い。小口積みも散見されるが概ね広口積みをとる。両小口部根石、次いで両側辺の順に、ほぼ埴底方の傾斜に沿い上開き気味に構築する。東半部に比し西半部はきわめの貧弱な觀を呈す。埴底の浅い凹みには、周囲のテラス部と同レベルまで棺床土が薄く介在する。その上面で長辺2.55m、短辺0.75mの、棺痕跡と思われる赤色土面を検出した。南東辺の東側小口部寄りから鉄槍（第15図5、図版6-16）1点が出土した。また崩落石中の拳大礫の状態から、裏込土に同礫を混入させた事が窺われる。以上のように石室内には、組合式と思われる木棺を安置し、その後、混石土により裏込を行い、土塙上段に木蓋を渡したものと思われる。また覆土中～上層から甕（第13図9・10、図版6-8）・小型器合口縁（同5）等、土師器片多数を出土し

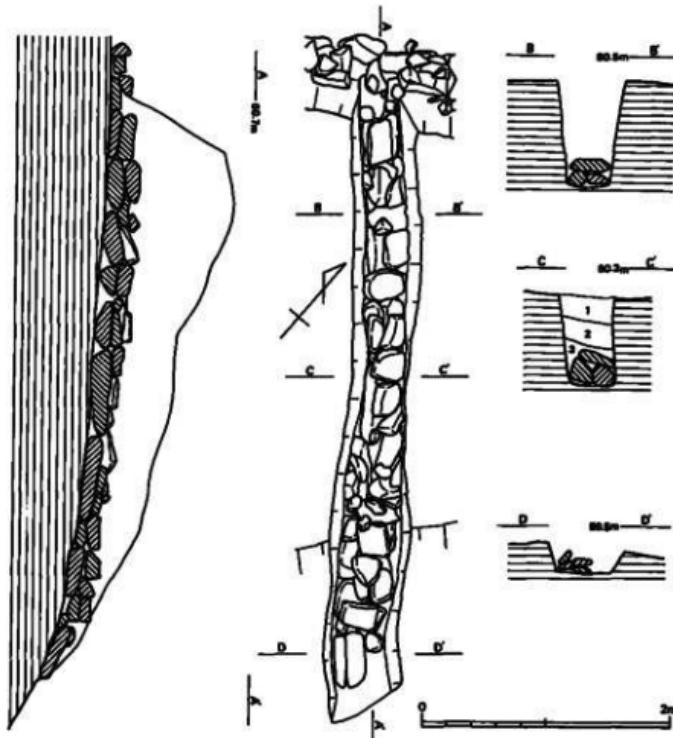


第10図 長迫第2号古墳1・2・4号主体部実測図 (1:40)

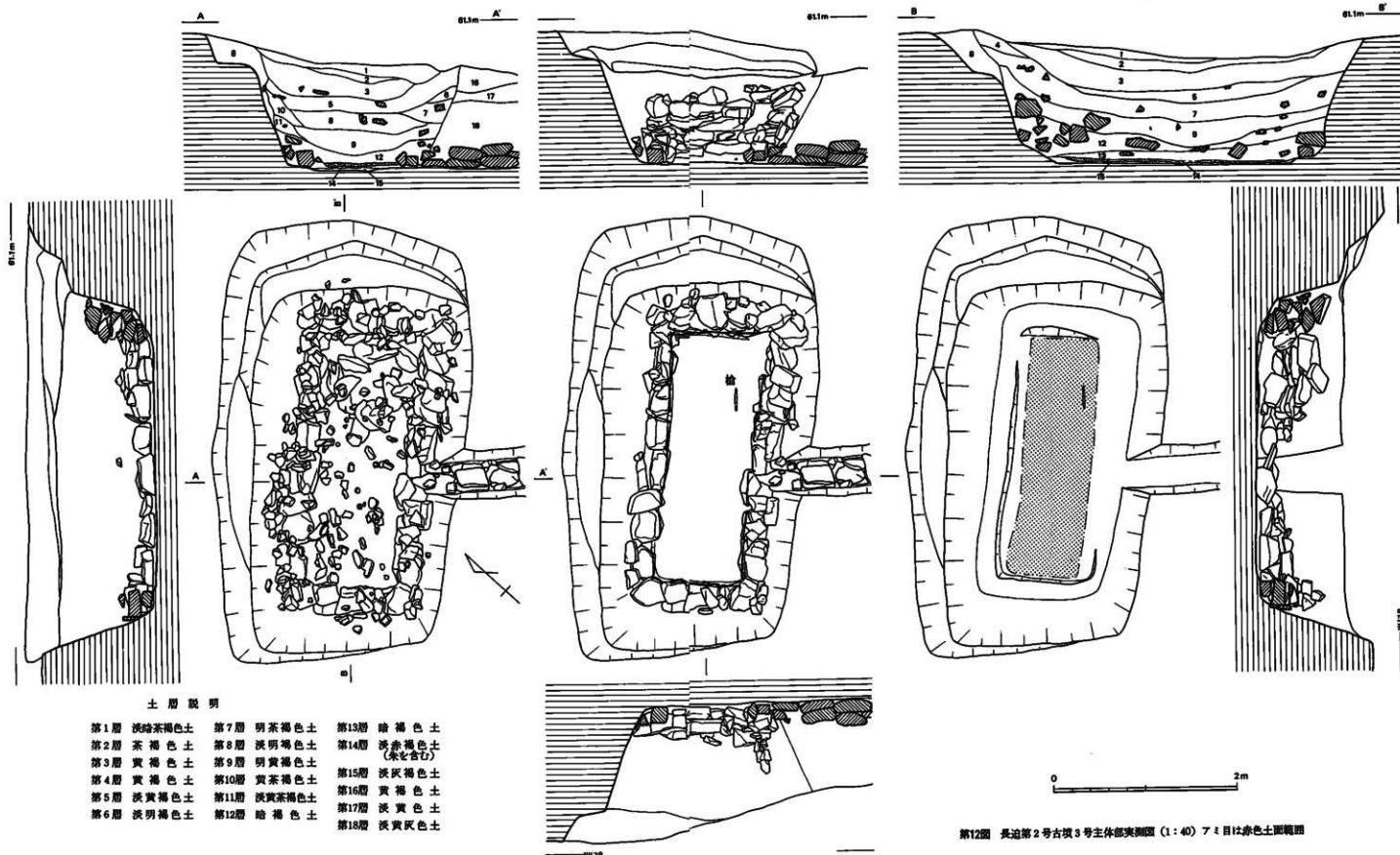
た。排水溝（第11図・図版5—6）は長さ5.2m、幅0.5m、深さ約1mで、墓塁から直交する。入水部は底の凹み部とレベルを同じくし約50cmのレベル差で端部に至る。石室主軸とは直角とならず、墓塁掘削と同時に掘下げ、石敷きの後、石室構築の前後には既に埋戻されていたと思われる。また同溝端は、溝底の傾斜等との状態から、本来の端部に近い部分と思われる。

4号主体部（第10図）

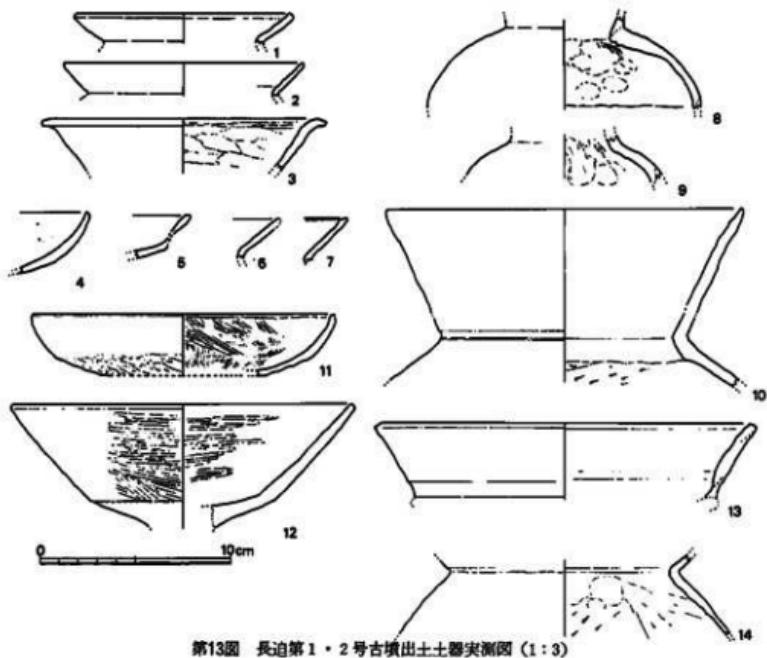
2・3号主体部の南西に約50cm程隔てて隣接し、他の3基の墓塁と主軸方位を直交（N35°W）させる。墓塁は中央で松の根による搅乱を受けていたため、平面プランは部分的に乱れるが、長軸1.85m、短軸0.75mを測り、上端からの掘込みは約130°と他の墓塁に比べ緩い。搅乱が著しいため土層観察は成し得ず棺床土等については不明であるが下端プランは長軸1.55m、短軸0.4mの端正な長方形を呈す。鏡（第15図3・図版6—13）が1点出土した。



第11図 長迫第2号古墳3号主体部付設排水溝実測図（1:40）



第12図 長治第2号古墳3号主体部実測図(1:40) 7:目は赤色土面輪図



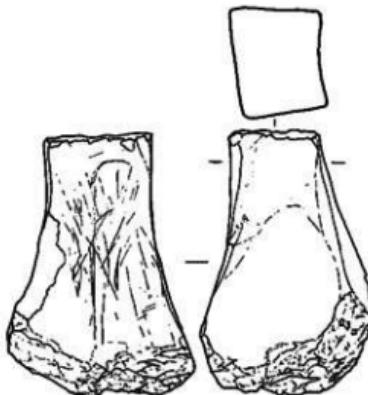
第13図 長迫第1・2号古墳出土土器実測図 (1:3)

遺物

土器 (第13図、図版 6)

図示し得たものは14点で、いずれも古式土器である。各主体部以外に、第2号古墳々丘 (第13図13・14)、同古墳溝底 (同6・7・11・12) からも出土した。第2号古墳2号主体部 (同2~4・8)、同3号主体部 (同5・9・10) 出土のものは擾土中・上層にかけてであり、いずれも細片化している。

器種別では、甕・壺・高杯・皿及び小型器台、鼓形器台と思われるもの、壺もしくは鉢の口縁部などがみられ、5・8・9・12は精選された胎土で、風化の進んでいる8を除き、丹頂痕跡が窺われる。個別的な時期差は下し



第14図 長迫第2号古墳溝出土石器実測図 (2:3)

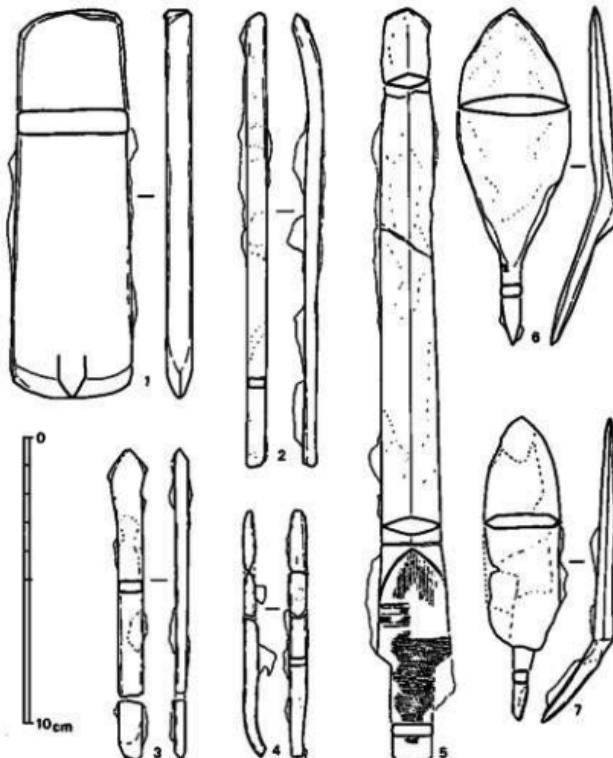
得ないが、概ね布留1式に対比される。

鉄器（第16図、図版6）

鉄器は総計7点がある。その内訳は斧1・鉈3・槍1・鎌2で、すべて古墳の主体部に埋葬されていたものである。斧（第15図1、図版6-10）は短冊形で残存状態の良好なものである。鉈（第15図2-4、図版6-13-15）は大小あり、鋒化が著しい。槍（第15図5、図版6-16）は柄の一部が残存するなど、良好なものである。鎌（第15図6・7、図版6-11-12）は両者でやや形態

が異なるが、茎
が同じように折
曲がっている。
これらはいずれ
も4世紀後半
を前後する時期
のものと思われ
る。

その他、第2
号古墳溝底から
古式土師器と共に
砥石（第14図）
が出土している。
よく磨滅した上砥と思われる。
3号主体部内から安山岩製
チップが出土して
おり、第2号住居跡半壊時の
混入かと思われるが即断しかね
る。



1 (第1号古墳主体部), 6・7 (第2号古墳1号主体部), 2・4 (同2号主体部),
5 (同3号主体部), 3 (同4号主体部)

第15図 長追第1・2号古墳各主体部出土鉄器実測図 (1:2)

第1表 長迫遺跡出土遺物観察表

土 器

器種	捕獲番号	法量(cm)	形態・技法
弥生土器	甌	6-1 口径 18	体部はナデ肩で、頭部はくの字状に屈曲し、口縁部は、短く外上方に伸び、端部は上方に拡張させ、その外面には凹線が3条めぐる。体部外面は頭部以下をタテハケメ、それ以上をタテヘラ磨きで、内面はナデ及び板状工具によるナデつけ。口縁部はヨコナデ。
		6-2 底径 5	6-1の底部と思われる。外面はタテヘラ磨き、内面はナデ。
		6-3 底径 6.3	底部片である。平底で、外面はタテヘラ磨き、内面・底面はナデ。
	高杯	6-4 口径 18	杯部片で、口縁部は外反気味に直立し、端部は外方にやや肥厚させ、口縁部と体部との境には強い稜がつく。体部は内外面ともていねいな弧状ヘラ磨き。
		6-5 口径 20	脚部片で、外反し、端部は外上方に拡張する。外面には3条の凹線、内面はヘラ削り。
		6-6 脚径 7.7	脚部片で、外反し、端部は外上方に拡張する。外面には3条の凹線、内面はヘラ削り。
土師器	甌	6-8 口径 15	口縁部～肩部片で、体部は肩の張らないもので、口縁部はくの字に短く外反し、端部はわずかにつまみ上げる。脚部外面・体部内面はナデ、口縁部・頭部外面はヨコナデ。
		6-9 口径 24.6	口縁部片で、くの字に外反し、端部は丸く終わる。体部外面はハケメ、内面はヘラ削り、口縁部はヨコナデ。
		6-10 口径 16.4	口縁部片で、短く外反し、端部は丸く終わる。体部内面はヘラ削り、口縁部はヨコナデ。
		13-1 口径 11.5	口縁部片でやや外湾気味に外反する単純口縁で、端部は角ばって内面にわずかに肥厚している。内外面ともていねいなヨコナデ。
		13-2 口径 12.7	くの字状に折返した単純口縁で、直線的に外反する。内外面ともヨコナデ。
		13-6	やや外湾気味に外反する単純口縁である。内外面ともヨコナデ。
		13-7	ほぼ直線的に外反する単純口縁で、端部内面で肥厚気味となる。内外面ともヨコナデ。
	13-14 頭部径12		頭部～肩部片で、体部は肩が張らず、口縁部は端部を欠失するが、外湾気味と思われる。頭部外面はヨコナデ、肩部より下半の内面はヘラ削り、頭部下半の内面は押圧痕を残す。
	壺	13-8 頭部径 6.5	頭部～肩部片で、やや肩の張った球形に近いものと思われる。体部外面は風化のため、詳細不明。内面は押圧後、ヨコナデ。胎土精選。
		13-9	肩部片で、接合部で破損している。外面は風化のため、詳細不明で

			あるが、丹塗痕がある。内面は押圧成形後、粗いナデ。胎土稍選。
	13-10 頭部径13	口径 18.8	口縁部～肩部片で、頭部は内面に稜をもち、口縁部は直線的に長く外反し、端部付近で一層外反して丸く終わる。体部内面はヘラ削り、口縁部はヨコナデ。
	13-13	口径 20	二重口縁の蓋あるいは鉢の口縁部片で、端部は平坦面を持つ。内外面ともヨコナデ。
高坏	13-12	口径 18	深めの坏部片で、ほぼ平坦な体部からにぶい稜を持って口縁部に移行し、直線的に外上方へ伸び、口縁端部は角張って終わる。内外面ともいわいなヨコヘラ磨きで、丹塗がされており、胎土稍選。
器台	13-3	口径 15	波形器台等の口縁部片と思われる。口縁部は外湾気味に外反し、端部はさらに外反させ、ほぼ水平に伸びる。口縁部内面は粗いヘラ磨き、外面部下は風化のため詳細不明。端部はヨコナデ。胎土稍選。
	13-5		小器台の口縁部と思われる。体部より細い段をもって外反する口縁部へ移行し、端部は外反気味で丸く終わる。内面はヘラ磨き、内外面とも丹塗り、胎土稍選。他に脚部片円孔部片がある。
皿	13-4		底部を欠失するもので碗状を呈す。底部外面はヘラ削り、口縁部外面及び端部はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケメ。
	13-11		底部を欠失するが、全体的に内湾するもので、口縁端部はわずかに内面に肥厚させている。底部外面はヨコヘラ削り、口縁部外面や端部はヨコナデ、底部内面は放射状の、口縁部内面は斜方向の細かなハケメ。
須 恵 器	坏身	6-11 6-12	底部を欠失するもので口縁部は内湾気味に広がり、端部はやや角ばって終わる。体部外面はヘラ削り、口縁部は回転ナデ。
		口径 12.8 13.8	底部は平坦で、口縁部は緩やかに外上方へ伸びる。回転ナデ仕上げで、薄手。
		6-14	高台のつくもので、口縁部・底部中央を欠失する。底部は平坦で、口縁部は外上方へ伸びる。高台は小さな箱型である。内外面とも回転ナデ。
		6-15	口縁部片で外上方に伸び、端部は丸く終わる。内外面とも回転ナデ。
	坏蓋	6-13	天井部中央及び口縁端部を欠くもので、平坦な天井部よりやや屈曲して口縁部へ移行する。内外面とも回転ナデ。

石 器

器種	捕獲番号	法量(cm)	形態・技法
楔形 石器	6—7	長 2 幅 2.2 厚 0.6	表面に素材剥片の平坦な面を残す。両辺は滑れ、両端に同一方向からのネガティブとポジティブな断面がある。安山岩製。30g
砾石	14	長 10.2 幅 3.2~5.7 厚 2.5	半丸、中央部で緩く内湾する四角柱を成し一端に剥離面を残す。また剥離面の後部は磨滅する。一面には使用痕と思われる主に縱方向の擦痕が密集。石材は凝灰岩製と思われ、緻密で淡乳黃褐色。227.2g

鐵 器

器種	捕獲番号	法量(cm)	形態・技法
斧	15—1	長 13.5 幅 3.8~4.3 厚 0.9~1.0	短圓形を呈す。刃はゆるく始刃状に外湾し、両刃である。木質の付着の痕跡はみられない。頭部には打撃痕が残る。鍛造。274.6g
鎌	15—2	長 15.7 幅 0.7 厚 0.5~0.6	幅に比べ、長い茎部を持つ。刃部は先端を失し、かつ銹化が著しく、裏すきは不明。先端部反り 8mm。鍛造。16g
	15—3	長 10.7 幅 0.9~1.4 厚 0.4~0.5	茎部は幅に比べ、短い。鍛造。6.1g
	15—4	長 8.6 幅 0.6 厚 0.5	茎部は幅に比べ、短い。鍛造。6.1g
槍	15—5	長 26.0 幅 1.5~2.6 厚 0.4~0.6	両刃で、柄の一部が残存しており、呑口式の槍である。茎部には糸巻痕がある。目釘穴は銹化が著しく不明。鍛造。118.5g
鎌	15—6	長 12.1 幅 0.8~4.0 厚 0.5~0.8	有茎の広根式である。柳葉形でやや椿葉形に近い。茎は約30度折れ曲がっており、故意に曲げたものであろう。鍛造。44.3g 両丸造
	15—7	長 11.1 幅 0.5~2.7 厚 0.5~0.7	有茎の広根式で、柳葉形を呈す。茎は15—6 同様約30度に折れ曲がっている。鍛造。両丸造。23.1g

IV まとめ

今回の長迫遺跡の調査では、昨年の石鈴権現遺跡群同様、弥生時代中期の住居跡と前期古墳群を検出した。これは從来、調査例が少なく不明瞭であった芦田川右岸地域の当該期の様相を知るうえで貴重な資料といえる。以下時代別に問題点を概観しまとめとしたい。

弥生時代 住居跡 2軒のほか、所属時期不明の溝状造構、柱穴列各 1 を検出した。住居跡は共に壁面中に小支柱を多く配するもので、遺存の良い第 1 号住居跡では、正円形で 2 本柱の構造をもつ。また当住居跡は斜面上方をカットした平坦面をもつ。カット面下端に溝状造構をもつことから、屋外排水施設とも考えられる。出土遺物は埴土上～中層で 7 ～ 8 世紀代の土師器・須恵器片が出土したほか、住居跡床面、テラス面の直上から弥生土器が出土した。このうち甕は内面へラ削りは見うけられず、口縁部拡張も概して顕著なものでない。高杯は杯部口縁端を内湾ぎみに丸くおさめるものと、直立して端部を外反するものがみられる。ともに弧状ヘラ磨きを行う。後者は小片の為、混入のおそれもあるが、前者では円板充填法をとり、脚柱部内面は丁寧にヘラ削りされる。これらは出土量と組成内容に欠けるが駅家住宅団地造成地内の池ノ内遺跡住居跡群のものに後続し、吹越第 2 号古墳墳丘下の第 3 号土塙出土一括遺物と比べ内面へラ削り、口縁部仕様等、これにやや先行する感をもつ。中期後半でも甕内面のヘラ削りが顕在化する直前頃であろうか。一部に混入品が見られるため判然としない。

古墳時代 前半期古墳 2 基を検出した。いずれも丘陵尾根線上に、一方を尾根に直交する溝によって、更に他辺は若干の地山形成を施したものと思われ、僅かな盛土は考えられるものの、整然としたマウンドを有する墳丘は想定し難い。

主体部は第 1 号古墳が 1 基に対し、第 2 号古墳は排水溝をもつ竪穴式石室を中心に 3 基の墓域が規則的に配置されている。主体部数、墓域規模・構造に差異を示す反面、副葬品は鉄器各 1 ～ 2 点で、武器と工具の差をもつ。鏡、玉類のセットを欠き、その貧弱さが目立つ。

次にその築造年代は、第 1、2 号古墳間で時期差を示すものを欠き、ともに出土した古式土師器から、布留Ⅰ式の内で把えられ、各主体部出土の鉄器類も、第 2 号古墳 1 号主体部の鉄鎌に若干の時期幅が考えられるが概ね 4 世紀後半を中心とした築造年代が考えられる。

以上、当古墳群は、出土遺物、排水施設をもつ竪穴式石室構造などに前期古墳の特徴を示すものの、その墳丘構造、集団墓的な複數埋葬等に、いまだ伝統的な側面を色濃く残している。これは、隣接する石鈴権現古墳群中、最大の墳丘を示し布留Ⅱ式段階で成立する同第 5 号古墳（前方後円墳）以外の墳丘構造、埋葬状況とも共通性をもち、三角縁神獣鏡などの出土で有名な潮崎山古墳、掛迫古墳ならびに加茂・石舎山 1 号古墳等の、地域の中でも卓越した古墳被葬者とは対照的な状況を示す。同地域における古墳時代への移行過程の複雑な様相を反映するものであろう。第 2 表に示す様に、当地域における弥生時代後期の墓制ならびに後期後半～布留式土器群の成立にかけて、充分に把握されておらず、今後両者の研究・編年作業を基礎に、地域における古墳時代社会への移行とそれに内在する諸問題の解明が課題とされる。

- 註① (財)広島県埋蔵文化財調査センター『石鏡椎現跡群発掘調査報告』1981。広島県教育委員会『石鏡椎現古墳群、第6・7・8号古墳発掘調査報告』1981。
- ② 広島県教育委員会『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』1976。
- ③ 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『石鏡山古墳群』1981。
- ④ 同上③の石鏡山第1号古墳のそれと類似するが、規模、底面の敷石状況等で劣る。
- ⑤ 類似する石室構造は弥生時代後期半～古墳時代初期にかけ、播磨、吉備、安芸、及び四國の一部に分布。各地域の伝統的な墓制を残す。その共通性、系譜等の背景が問題とされる。
- ⑥ 小片が多く不鮮明な点が多い。藤田憲司氏編年(考古学雑誌、1979)の山陽第V期、高橋義氏編年(考古学ジャーナル、1980)のXC期の一部に対比されよう。
- ⑦ 山陽団地埋蔵文化財調査研究所『用木山古墳群』1975、奈良県立橿原考古学研究所編「メシリ山古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第35冊 1977他。
- ⑧ 第5号古墳主体部は竪穴式石室系の積石塚様状をなし、排水施設を有していた可能性がきわめて高く、本遺跡第2号古墳3号主体部との関連が注目される。
- ⑨ 脇坂光彦「広島県芦品郡潮崎山古墳について」『古代学研究』第90号 1979。
- ⑩ 掛迫古墳調査団「掛迫古墳」『藝術文化』第5・6合併号 1956。

第2表 周辺遺跡対比表

	赤 生 時 代	古 墓 時 代
	中期・中(中后半・末)(前) 後期(後)	
弥生式土器集成 1964	(神 谷 川 式)	
駅家団地造成地 内遺跡群 1976	並ノ内・手傍谷・地底式	
堂 墓 内 1977		
神辺・御領 1980	SD3	SD7 SD1 SD4
神辺・御領 1981	SX41 SK12 SD21	S XII SD9
大宮(4次)1981	SLD161 SKD071	
吹 越 1981	2号住 1号住	
石鏡椎現 1981	SB4 土器塗り、SK2	
長 迫	SB1	
墳 墓		長迫古墳群 —石鏡椎現古墳群— 池ノ内 土器塗り
関 係	吹越土塙墓群	-----吹越古墳----- 石鏡山古墳

(註) 弥生時代と古墳時代との区分は、当地の庄内併行期から布留式への移行が不鮮明なため、ここでは一応、在地色を一掃する布留式傾向壺等の土器群の成立をもって區した。

図版 1



a 長迫遺跡遠景（南東より）



b 長迫第1号古墳調査前全景（南より）



c 長迫第2号古墳調査前全景（南西より）

図版 2



a 長迫遺跡第1号住居跡（南東より）



b 同 上 （南東より）

図版 3



a 長迫第1号古墳全景（南より）



b 同上 主体部（北より）



c 同上 溝（南より）

図版 4



a 長迫第2号古墳全景（南西より）



b 同上 1号主体部（南西より）

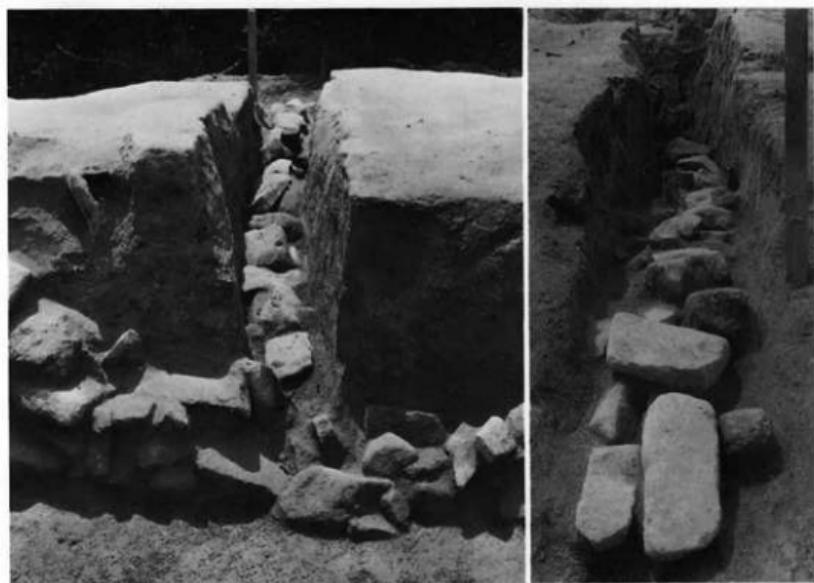


c 同上 2号主体部（南西より）

図版 5

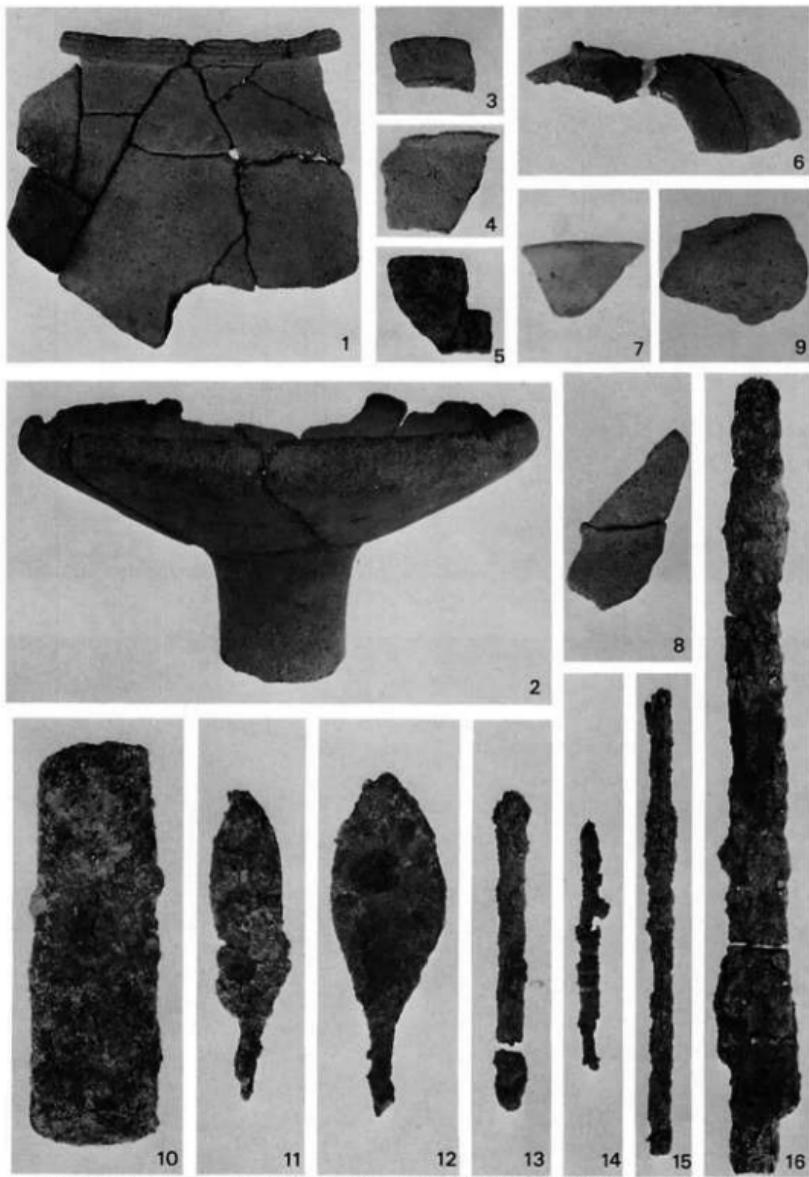


a 長迫第2号古墳3号主体部（南西より）



b 同上 付設排水溝（左：北西より，右：南東より）

図版 6



長迫遺跡出土遺物 1・2 (第1号住居跡), 3・10 (第1号古墳主体部), 11・12 (第2号古墳
1号主体部), 6・7・14・15 (同2号主体部) 8・16 (同3号主体部),
13 (同4号主体部), 9 (同溝), 4・5 (同埴丘)

長迫遺跡発掘調査報告

—県営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査—

昭和57(1982)年3月

編集・発行 広島県教育委員会
(財)広島県埋蔵文化財
調査センター

印 刷 株式会社 柳盛社印刷所